

安倍外交七年八カ月を語る（連載・完）
官邸外交を支えた
組織・人・言葉



特別インタビュー

前内閣総理大臣

安倍晋三

あべ しんぞう 1954年生まれ。成蹊大学卒業。神戸製鋼勤務後、外務大臣秘書官などを経て、1993年衆議院議員選挙に日山口1区から自民党公認で立候補し初当選。以来連続9回当選。その間、政府において内閣官房長官、党において幹事長などを歴任。2006～07年および2012～20年内閣総理大臣。首通算在職日数3188日、連続在職日数2822日はいずれも歴代最長。

撮影・尾田信介

省庁間の壁を乗り越えて、外交・防衛の司令塔として機能したNSC。相手国の国民の心に、日本の存在を刻むため、何度も推敲されたスピーチ。機動的な体制とそれを支える世論という、民主主義国家における外交の要諦を語る。

聞き手…田中明彦 政策研究大学院大学学長・本誌編集委員長

——連続インタビューは今回で最終回となります。はじめに、総理は第一次政権のときから「戦後レジームからの脱却」を掲げてこられました。いま振り返ってみて、この目標はどの程度成し遂げられたとお考えになりますか。

政治における国家意識の回復

安倍 戦後レジームに関する最大の論点は憲法です。私は政権発足当初から、私たちの手で新たな憲法を作りたいと考えていましたが、残念ながら、いまだ憲法改正にはたどり着いていません。しかし第一次政権の頃と比べれば、衆参両院の憲法調査会において国民投票法改正の議論が進み衆議院で改正案が成立するなど、国会において憲法論議を行う機運は高まっていると思います。

私の問題意識としては、戦後日本において国家意識が非常に希薄であることへの違和感、危機感があります。ともすれば国内においては個人の権利、国際的には国連や世界市民との連帯といった意識ばかりが醸成され、国家のあり

方について考えることを忌避するマインドが定着してしました。その憂慮すべき帰結の一つは教育であり、これは第一次政権で改正教育基本法を成立させました。

もう一つの帰結は、安全保障、特に軍事面に関するリアルな思考の欠落です。第一次政権においては防衛庁の省昇格、第二次政権では国家安全保障会議（NSC）創設と国家安全保障戦略の策定、さらに平和安全法制を成立させ、条件付きながら集団的自衛権の行使に道を開いてきました。特にNSCについては、総理大臣の下に外交・防衛・情報を統合し、政府全体の司令塔となる組織ができたことの意味は、国益の観点から非常に大きな意味を持ちました。

——一九九〇年代までは、マスメディアやアカデミズムで「国益」などという言葉を使えば、「お前は右翼か」と言われた時代でした。しかし、いまや多くの人が国益を語り、軍事についても現実的な議論ができるようになりました。この十数年の変化は大きいと感じます。

安倍 政治の世界も同様です。私の父が外務大臣のときは、

「国益」という言葉自体が避けられていました。それが国会においては野党が堂々と国益を語る時代です。安全保障はもちろん、開発援助の分野でも国益の観点が踏まえられようになりました。

NSCを機能させた谷内体制

——改めて、安倍外交においてNSCが果たした役割を伺います。NSCの前身である安全保障会議は、多分に形式的な会議だったようですが……。

安倍 安全保障会議は、要は防衛予算を承認する会議であり、体系的な政策を議論する場ではありませんでした。その意味で、ご指摘のように形式的な要素が強かったですね。私も官房副長官として初めて会議に出席したとき、正直に言って「こんなものか」と感じました。

——NSCを発足させたことで、どのような変化がありましたか。

安倍 中心となる四大臣会合（首相・官房長官・外相・防衛相）では、外交・安全保障に関する大きな戦略や重要政策、その前提となる情報分析などについて、率直に議論します。詳細は申し上げられませんが、ミサイル防衛と抑止力、中国への向き合い方など、かなり活発な議論になりました。

す。議論の経緯を四大臣が完全に共有していることで、その後の政策遂行はスムーズになり、内閣の一体性が生じました。

——かつて外務省のOBから、日本の外交政策というのは、課長と局長と次官の三人の合意のことなのだと聞いたことがあります。それが安倍政権で大きく変わりました。

安倍 二国間関係だけではなく、さまざまな側面から分析できるようにしました。インド太平洋全体のパワーバランス、特に中国を含めた状況を念頭に置きながら考える、ということですね。日中関係も二国間だけを見ずに、大きな戦略の中に位置付けた上で、具体的な政策を展開させる。NSCがなければ官邸外交は成り立たなかったと思います。

——NSCの事務局となる国家安全保障局（NSS）には、各省から有能なスタッフが集められました。

安倍 各省庁とも優秀な人材を送ってくれました。なかでも、初代局長を務めた谷内正太郎さんの存在感は大きかったですね。外務省、防衛省、警察庁はそれまで、そりが合わないところがありました。情報も自分のところで抱え込んで、なかなか共有しようとしません。そのような状況で、谷内さんがもし外務省の代表としてふるまっていたら、N

SSは機能しなかったでしょう。しかし彼は外務省時代から防衛省・警察庁と、あるいは産業界やアカデミズムの人とも広く付き合っていたことで、確かな人脈があつた上に、人徳もありました。現在の北村滋局長も、警察の枠にとどまらない人材です。いくら仕組みをつくっても、人がいないとうまくいきません。

——アメリカのNSCは、非公開を前提とした戦略文書が作成されていますが、日本にもそのような機密の戦略文書はあるのでしょうか。国家の中枢の政策決定について、公開できない文書があるのは当然のことですが、他方で歴史の検証という意味でも、全て非公開ではなく、ある程度の期間が経過した段階で、一部の戦略文書については、公開を検討されてもよいと思いますが、いかがですか。

安倍 ご指摘のとおりで、ある程度公開できるものは、国民と共有するべきだと思えます。

スピーチライター谷口氏との出会い

——安倍総理は、歴代総理の中でも特に演説に力を入れており、国会の所信表明・施政方針演説だけでなく、国際会議や各国の議会でも、さまざまなエピソードを集め、たいへん凝ったスピーチを次々と発信されました。

安倍 安倍政権の特徴は、スピーチライターを置いたことです。スピーチライターがいないと、演説は各省が持ち寄った文章のつぎはぎとなり、結果として事実や実績を並べただけの「資料」になりがちです。政治家としては、聴衆のハートに刺さる、思考を揺るがすような演説をしたい。特に国際的な舞台では、日本の存在感を高めていかねばなりませんから、なおさらそうです。

海外の主要な演説については、谷口智彦さんが書かれました。演説を準備する段階において、谷口さんは私と対話を重ねて、時に私の人生に分け入りながら、さまざまなエピソードをくみ取りつつ、私の主張を十二分に伝えるような原稿を書きます。彼としては、誇張ではなく、全身全霊をかけた作業だったと思います。国内の演説では、谷口さんのほかに、佐伯耕三さんを中心に若手女性の日野副参事官たちに手伝ってもらいました。

——谷口さんとの接点は、どのあたりにあったのですか。

安倍 第一次政権のときにさかのぼります。当時谷口さんは外務副報道官として麻生大臣のスピーチを作っていました。そこで私が、二〇〇七年八月のインドでの国会演説「二つの海の交わり」を頼んだのが、彼との最初の仕事でした。たいへん印象的なスピーチで、第二次政権が発足した際に、

ライターとして加わっていただきました。

第二次政権での最初のスピーチは、実は八月一五日の全国戦没者追悼式での総理大臣式辞でした。この式辞は、内容そのものよりも、式辞で使われる言葉遣いが過去と比較してどう変わったか、といったことにはかり注目が集まっています。しかし私は、あの場合は戦没者追悼という趣旨に鑑みても、英霊に対して言葉を発するべきであり、そこに場違いな反省など不要であると考えていました。それを谷口さんに伝え、案を練り始めたのですが、そうすると全体の構成もこれまでとは大きく変えねばなりません。そこで思い切って、詩的な表現を入れながら、これまでにない式辞を読み上げました。翌年からは元のスタイルに戻しましたが、この一回目のスピーチが非常に良かったので、その後も引き続きお願いした次第です。

演説の力で国際世論をつかむ

——ほかにもいくつか印象的なスピーチがありますね。

安倍 特に記憶に残っているのは、二〇一四年七月のオーストラリア国会両院総会での演説です。その主旨についてはすでに申し上げましたが（本誌六四号、インタビュアー第一回参照）、両国の歴史を振り返る際に、謝罪ではなく、

ココダヤサンダカンという先の大戦での激戦地を挙げながら、そこで命を落とした人々への哀悼と、戦後オーストラリアが示してくれた日本に対する寛容の精神への感謝を述べました。

また、一つの演出として、ギャラリーに着席するゲストに呼びかけるスタイルも取り入れました。欧米ではよく見る光景ですが、日本では珍しい。これも谷口さんのアイデアです。東日本大震災で救助隊を率いて来日してくれたロバート・マクニールさんに謝意を伝え、また、オリンピックを絡めて、一九六四年東京大会の女子競泳選手だったドーン・フレイザーさんに「二〇二〇年もお越しください」と呼びかけました。そして彼女の名前と夜明けを意味するドーン (dawn) をかけて、日豪の未来に新しい夜明けを、と結びました。

一五年四月のアメリカ連邦議会上下両院合同会議での演説でも同様に、ローレンス・スノーデン元海軍中將を議場にお呼びしました。彼は一九四五年二月に硫黄島に上陸した兵士であること、その後硫黄島で開かれる日米合同の慰霊祭にしばしば参加していることを紹介した上で、「硫黄島には、勝利を祝うため行つたのではない、行っているのでもない。その厳かなる目的は、双方の戦死者を追悼し、

榮譽をたたえることだ」との彼の言葉を引用し、その和解への努力をたたえました。聴衆の心に響くという点では、たいへん効果があったと思います。

——アメリカ議会の演説では、キャロル・キングも登場します。

安倍 「君の友だち (You've Got a Friend)」の詞を引用しました。昔からよく聞いていましたが、東日本大震災のときに手を差し伸べてくれたアメリカに対する感謝を、「友だちがいた」という彼女の歌に重ねて表現したものです。これは今井尚哉補佐官のアイデアです。

——日米の和解という点で、真珠湾の演説（一六年一月二七日）も印象的でした。

安倍 あの演説も詩的な表現を多用しながら、アメリカ国民の心に訴えようとしたものです。重要な演説はほとんど、谷口さんとじっくり話し込み、時に今井さんや外務省の鈴木浩秘書官も加わって、練り上げていったものです。

——内容だけでなく、読み方や演出など、細部に至るまで作り込まれています。その分、準備は大変でしょう。

安倍 そうですね。特に英語のスピーチは相当に時間をかけて準備しました。谷口さんには発音を直され、所作についても助言をもらいました。

ただ、一国の首相として、日本の存在を相手の心にしっかりと刻みつけられなければ、せっかくの機会が無駄になります。日本人は元来控えめを美德とします。しかし、日本という国家は世界三位の国内総生産（GDP）を持ち、政治、経済、安全保障、いずれの分野においても高い潜在的能力を持つ国です。その国がどのようなビジョンを持ち、国際社会にどのように関わろうとしているか、それをしっかりとアピールすることは、総理大臣の重要な職責の一つではないでしょうか。

——ご指摘のように、外交において言葉が持つ力は依然として大きく、その意味で優れたスピーチライターの存在は、国際社会における日本のプレゼンス向上に不可欠ともいえます。私が学長を務める政策研究大学院大学では、「外交アカデミー」と称し、各省庁の若手官僚を集めて外交プログラムを展開しています。その中で、谷口さんにスピーチ・ライティングの演習を担当していただいており、インド国会での「二つの海の交わり」演説を素材に授業をされているそうです。演説の重要性が国民やメディア、学界に正しく理解され、その任を担える人材が育成されることは、外交の基礎体力を増進させるためには不可欠な要素だと思っています。長時間にわたり、ありがとうございました。●